

技術とマネジメントの美学

八巻直一（やまき なおかず）
静岡大学情報学部 特任教授

1. 芸術を鑑賞する

芸術は、我々素人が鑑賞する対象である。したがって、どんな作品であろうとも、一人一人の評価が好き勝手に分かれて差し支えない。しかし、そうすると芸術作品（本書でいえば技術やマネジメントでさえ）は、遂に普遍的評価は得られないということになるのではないか。そうすると、古今に残る名作とは、多数の人々が感動した多数決みたいな評価なのだろうか。

さて私は、「美学への招待」（佐々木健一、中公新書、2004）を手にかけている。この本で佐々木先生は、我々素人向けに「美学」「芸術」そして「感性」について解説をしてくださっている。佐々木先生によれば、そもそも西洋において「芸術」という概念が独立して認識されるようになったのは、ルネッサンス以降だそうで、その後「芸術」を鑑賞する立場を、哲学的に探求する「美学」が生まれたのだそうである。初期の美学の目的は、まさに芸術鑑賞における美の評価を普遍的に与えることも含まれていたそうで、カントなどの高名な哲学者も登場して華やかに議論が咲き誇ったらしい。

しかし、近代になって状況は一変し、芸術は果たして美しいことが存在価値であるか、という議論になっているそうである。20世紀初期に、ある展覧会に出品された作品が、なんと市販の便器そのものだったという「事件」があったそうである。この事件を契機に、専門家にとって、この作品が果たして芸術なのかどうかについて論じるには、新しい理論が必要となったのであった。素人には便器が芸術とは断じて思えないが、高名な芸術家が堂々と展覧会に展示したら、何とかして理解しようと努めるのではないだろうか。「常識」は便器を芸術から排斥しようとする一方、展示されたからにはそこから何らかのメッセージを理解しなければならない、という葛藤にさいなまれるに違いない。芸術を鑑賞する側

の武器は「感性」であるが、便器は素人の感性をいささか狂わせそうである。

おそらく、便器たる作品は、20世紀初頭の人々の記憶にはそれまで蓄積されていない種類のものであり、評価が多数決で決まることすら許さなかっただろう。したがって、革新的な芸術は、おそらく専門家の哲学的な基準でしか評価できなかったに違いない。

佐々木先生によれば、新しい芸術作品は多くの場合、よく知られた古いものよりも評価が低いのだそうである。シェーンベルクなどの現代音楽よりも、バッハやモーツァルトの楽曲の評価が素人の間でより高いのは、何となくわかるような気がする。しかし、肝心のバッハだって、生前は今のように「音楽の父」扱いされるほどの評価ではなかったようである。つまり、当時の最新ナンバーだったわけで、年月を経て醸成されてくるにつれて、めきめきと評価を高めたということである。演劇の世界はもっと顕著であり、中世に登場した西洋の演劇にせよ、日本の歌舞伎にせよ、次の上演には新しい脚本をぶつけることが当たり前だったようで、現在のように古典劇として繰り返し上演されるわけではなかったそうである。

ここからは、全くの素人の妄想をお許し願おう。芸術を鑑賞する際のセンサーは、「感性」であるということなのだが、センサーたるにはセンシング精度が問題になるであろう。感性は恐ろしくノイズを拾う不確定なものに違いないので、非常に多くの学習を繰り返しながら、ばらつきを縮小することになる。これが所謂目利きの経験というわけなのだろう。私はバッハが好きなのだけれども、どの演奏会に臨んでも名人上手は全く同じバッハを聞かせてくださる。しかし、何度も聞こううちに、それらの間のほんの少しの表現の違いを発見して感動することを覚えたのである。一方、聞いたこともない新しい楽曲だとうどうだろうか。私の感性はいささか異常動作

に陥り、大抵は感動するような境地に達する前に疲れてしまう。

想像するに、古典芸術が新しい作品より素人の評価が高い傾向にあるわけは、右のような感性の働きが誰にでもあるからではないだろうか。技術やマネジメントにおいても、多分同じことがいえそうである。革新的な技術やマネジメントは、評価が大きくばらつき、定着するに従って、より普遍的な評価を獲得するのではないだろうか。

佐々木先生によれば、芸術の評価を安定させるには、「美学の世界の住民（つまり専門家）」の評価が安定することが必要だそうである。この説にしたがえば、新しい芸術作品に我々素人が戸惑い、感性が混乱するのやむなしとするべきであろう。

2. 技術の美学

美学の起りには、芸術作品を鑑賞する立場に関する哲学的考察の学問だったそうである。でも、我々は美学という単語を来歴などにかまわず使用している。たとえば、「彼の人生の美学」などという言い回しである。あるいは芸術を持ち出して、「イチローのバッティングは最早芸術ですね」などと評論家がのたまう。この表現は、イチローのバッティングを芸術作品と見なし、それを鑑賞する美学的立場からの評論ということになる。ここでは、バッティング技術と芸術が境界線を跨いで交差しているように見える。

技術はそれが究極の高みに近づくとつれて、芸術との境界線が明瞭でなくなり、美的鑑賞の対象にさえなることを知らされる。かの名刀正宗は、最高の刀の一つとされているが、その意味は実用としての評価にとどまらない。名刀の評価は美学的見地から（つまり芸術作品として）行われることになる。しかも、その評価は専門家だけのものではなく、素人にも受け入れられているのである。

技術の最高の境地は「芸術」であり、その作品（製品）を使う側の「美学」的評価に耐える高みということになる。素材を加工する技術、製品を組み立てる技術、サービスを提供する技術、みんな同じ高みを目指すことになる。例えば、熟練した職人の技術は最早芸術であり、美しいコンピュータプログラムもまた芸術である。

世の中には、プログラム考古学なる分野が存在する。昔のプログラムを読んで、感心しようというものである。ここに、新しい人類の芸術としての、コンピュータプログラムがある。文芸のような、音楽や絵画のようなソフトウェアは確かに存在する。現在のソフトウェア工学は、他の工業におけるプロジェクトマネジメント技術の模倣の域を出ないようだが、21世紀中には急速に様変わりするに違いない。おそらく、ソフトウェア工学は、芸術、職人芸そして工業製品の、混血児と位置付けた生産工学体系に再編されるだろう。

技術畑における日本的感性を分析する立場から名刀正宗を観察すれば、古今の日本の熟練工が目指していた極致が理解できるような気がする。日本ガラパゴス論の意味するところは、現在の日本企業全体に溢れる「技術」の「芸術」への昇華意欲の表象といえるのだろう。このような意識はおそらく洋の東西を問わず大なり小なり存在するに違いないが、ガラパゴスというくらいだから、日本民族の遺伝子にはより強く伝承されているのではない。

3. マネジメントの美学

マネジメントの世界では、はたして技術と同様に「芸術」まで達するというようなことがあり得るのだろうか。西洋では、ルネッサンス以降様々な分野で天才を誕生させてきたが、戦争の分野の天才といえば、かのナポレオンを指す。戦争の作戦立案や指揮はマネジメントであり、その意味ではナポレオンはマネジメントを芸術たらしめた人物といえるのだろう。日本でなら、源義経は戦争におけるマネジメントの天才であり、彼の作戦は芸術といえるだろうし、織田信長も同様の評価を下して差し支えなさそうである。経営でいえば、松下幸之助は「経営の神様」と讃えられているところであり、おそらく彼の経営は芸術の域と見なされているに違いない。

このように、何人かの例を挙げるだけでも、マネジメントの世界でさえ美学は存在することは明らかであることがわかる。プロ野球の世界などでは、監督のマネジメント技術がすぐに戦績に反映するので、大変わかりやすい。「グラウンドには銭が落ちている」という名せりふで選手を鼓舞し、偉大な戦績を残した名監督の話は、日本的感性を大いに刺激す

る「監督の美学」の具現者として歴史に名を刻んでいる。他の分野でも、優れた経営者達が、多くの「美学的」逸話を残している。要するに、「マネジメントの美学」は存在するのである。

問題は、マネジメントの美学において、日本的なものが特異かどうかである。アメリカ大リーグの名監督たちの中に、「グラウンドに銭（ドル？）が落ちている」といった監督がいらっしゃるかは不明だが、そういうことは仰らなそうな気がする。そもそもマネジメントの対象は組織であるが、組織の有り様が日本と西洋とで大きく異なる、という議論が一般的になっている状況であり、その意味からも前述の「リーダーシップの発露方法」は米国的ではない。後述するところであるが、西洋の組織は共通の目的を持ってそれぞれの能力が集合した「資格集団」であり、日本の組織は同じ釜の飯を食う運命共同体として形成されるのだそうである。

ともあれ、「日本のマネジメントの感性」は、「芸術」「美学」「感性」の関係の中で述べられる事象であるという認識は成立するらしい。感性は、何も文学や絵画などの芸術の世界の専売特許ではない。感

性は日常的な感覚であり、民族文化の心のインフラととらえるべきであろう。演歌を聴いては涙する日本人が、ピカソを見て同じ涙は決して流さない。片や感性をもって鑑賞し、片や知性（あるいは見栄っ張り）をもって鑑賞するからである。我々は、仕事を設計する際、隙のない（どこに出しても恥ずかしくない）考察を注入しなければならないと思っているが、その評価の視点として西洋のビジネスマンを意識してはいないだろうか。グローバルな（西洋の）価値を評価したい、というところである。つまり、ピカソが理解できなければ一流のビジネスマンではない、という意識がありはすまいか。

略歴

八巻 直一（やまき なおかず）

1970年東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了。同年東京理科大学理学部応用数学科助手。その後株式会社システム計画研究所取締役を経て、静岡大学工学部教授。2009年4月より現職。工学博士。